

初期イスラム同盟 (1912～17年) (I)

—— インドネシア前期民族運動の研究 ——

しら
白

いし
石

たかし
隆

はじめに

- I イスラム同盟の成立と拡大——中心（以上、本号）
 - II イスラム同盟の成立と拡大——周辺部
 - III チョクロアミノト独裁——Eénhoofdbestuur
- 結語にかえて （以上、第22巻第8号）

はじめに

イスラム同盟(Sarekat Islam, 以下S Iと略称する)は、「イスラム」と「進歩」(kemadjuan)を指導理念として、1911年暮、中部ジャワの王都スラカルタ(ソロ)に結成された、インドネシア前期民族運動または人民運動(pergerakan rakyat, volksbeweging)史上最初のそして最大の大衆的民族運動団体である。それは、1912年半ば頃からジャワ全土に拡大を開始して1914年4月までに会員数約40万人に達し、その後は、議長ラデン・マス・ウマル・サイド・チョクロアミノト(Raden Mas Oemar Said Tjokroaminoto)の指導下にスマトラをはじめ外領へと組織を拡大していった。

一般に、インドネシア前期民族運動は三期に分けることができる。第一期はインドネシア最初の民族団体ブディ・ウトモ(Boedi Oetomo)の設立(1908年)から第2回中央イスラム同盟(Centraal Sarekat Islam, CSI)会議(1917年10月)までの時期である。この時期、東インドの民族運動とはすなわちS Iの運動のことであり、それは、「イスラム」と「進歩」を指導理念とし、集会をその主要な運動形式とするものであった。ついで第二期は

第2回C S I会議より1921年10月の第6回C S I会議までの時期である。この時期は、前期民族運動史上、最大の昂揚期であり、運動は、S I内部においては、スマランを拠点とする東インド社会民主同盟(Indische Sociaal Democratische Vereeniging, ISDV)派とジョクジャカルタを拠点とするスルヨプラノト(R. M. Soerjopranoto)、ハジ・アグス・サリム(Hadji Agoes Salim)派の対立をはらみつつ、解放(merdeka)と平等・連帯(sama rata sama rasa)を指導理念とし、ストライキをその主要な運動形式として、主に労働運動の領域で展開した。また、この時期には、S Iとならんで、国民東インド党=ヒンディア同盟(Nationaal Indische Partij=Sarekat Hindia)が特にスラカルタ地域において勢力を拡大し、民族運動の多極化を促した。そして最後に第三期は、二重党籍禁止によるC S Iからの共産党員排除を決議した1921年10月のC S I会議から、1926、27年のインドネシア共産党(Partai Komunis Indonesia)蜂起までの時期である。この時期には、共産党と人民同盟(Sarekat Rakyat)が解放と平等・連帯に訴えて民族運動を領導し、その蜂起とともに前期民族運動も終息した。以上の前期民族運動三期のうち、本稿が対象とする初期S Iの時期とは第一期のことである。したがってここではS Iを論じることが同時に、この時期の民族運動総体を論じることにもなっている。

さて、この初期S Iについてとりわけ注目すべきことは、次の2点に整理できる。第1は、S I

の中心と周辺部における運動の意味付けの乖離である。S I の中心においては洋式教育を受けた知識人が指導性を掌握し、進歩とイスラムを中核的理念として運動の意味付けと課題の設定を行なった。ところが運動の周辺部では、華僑に対する暴行事件、内務官僚に対する不敬行為、ラトゥ・アデイル(Ratoe Adil, 正義の王)到来と理想の王国実現への期待の昂まりなど、およそ指導者の意図せざる運動の意味付けとそれにもとづく行動とが惹起された。そして第2は、そのような中心と周辺部における意味付けの乖離と直接的な関連をもって、運動が「洪水のごとく」拡大し、そしてその後また、急速に退潮していったことである。しかし、従来の研究においては、以上の2点は必ずしも説明を要することとは考えられなかった。なぜなら、これまでの研究は、S I をラトゥ・アデイル運動のごとき「伝統的」運動から「近代的」運動への移行形態とみなし、したがって、そのイデオロギー、組織、リーダーシップがいまだ「伝統」から「近代」への移行状態にある以上、運動の拡大が周辺部における混乱を生み出すことはきわめて自然なことであったからである(注1)。しかし、S I を「伝統的」運動から「近代的」運動への移行形態と規定することは、中心における「近代的」リーダーシップがなぜ周辺部において「伝統的」運動と同質的なラディカリズムを誘発したのかを説明するものでもなければ、なぜS I が急速に拡大し、急速に退潮したのかを説明するものでもない。本稿は、このことに鑑み、初期S I についての基本的事実関係を整理しつつ、課題提示におけるシンボルの多義性と、集会という場における運動の意味変換に注目して、S I 運動に付与された意味を分析し、これをとおして以上の2点、すなわち運動の中心・周辺部の乖離および運動の急速

な拡大と退潮を説明することを目的とする(注2)。

以下、第I節で、まずジャワ各地におけるS I 運動の中心の成立を整理したあと、指導者の提示した意味とかれらが共有し演じた意味を分析する。ついで第II節では、周辺部について、集会の創出する空間の象徴的意味を分析し、そのあと支部の状況をいくつかの事例について検討する。そして第III節では、1914年4月から1917年前半までのチョクロアミノト指導下の初期S I について、その指導性、地方S I の状況、バタヴィアS I 議長ラデン・グナワン(Raden Goenawan)のチョクロアミノトに対する挑戦と敗北などについて論じる。

(注1) そのような研究の代表的なものとして、Sartono Kartodirdjo, *Protest Movements in Rural Java*, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, Oxford University Press, 1973 が挙げられる。またこのため、これまでのS I についての研究は一般に、運動中枢における「近代的」リーダーシップか、周辺部におけるラヤット・ラディカリズムの表出か、いずれかを一方的に強調するものであった。前者の例が、Blumberger, J. Th. Petrus, *De Nationalistische Beweging in Nederlandsch-Indië*, Haarlem, 1931; Van Niel, Robert, *The Emergence of the Modern Indonesian Elite*, The Hague, W. van Hoeve, 1960. 後者の例が、Dahm, Bernhard, *Sukarno and the Struggle for Indonesian Independence*, Ithaca and London, Cornell University Press, 1965, pp. 12-20である。またその他の研究としては、Noer, Deliar, *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*, Oxford University Press, 1973; 深見純生「成立期イスラム同盟に関する研究——イスラム商業同盟からイスラム同盟へ——」(『南方文化』第2輯 1975年) 111~127ページ; 同「初期イスラム同盟(1911-16)に関する研究(1), (2)」(『南方文化』第3輯 1976年 117~145ページ, 第4輯 1977年 151~182ページ); 同「サレカット・イスラムの地方指導者」(『南方文化』第5輯 1978年) 73~94ページ; 同「いわゆるイスラム商業同盟について」

(『アジア経済』第20巻第9号 1979年9月) 22~43ページ。

(注2) 一般に、運動とは、指導者が課題を提示し、これを他の人々に伝達して、他の人々において課題処理のために必要とされる行動系列を再生する過程であり、リーダーシップとフォロワーシップの乖離は、課題伝達の過程における「歪み」によって生ずると考えることができる。したがって、本稿は、この「歪み」を、提示された課題の多義性と、課題伝達の場の象徴的特性によって説明しようとするものである。なお、京極純一「リーダーシップと象徴過程」(『政治意識の分析』東京大学出版会 1968年) 233~282ページ参照。

I イスラム同盟の成立と拡大—中心

イスラム(商業)同盟「Sarekat (Dagang) Is'lam, S(D)I」は、1911年暮、華僑会党コン・シン(Kong Sing)との暴力的衝突、華僑に対するボイコットという騒然たる雰囲気の中で、スラカルタ、ラウエアン地区のパティック商人ハジ・サマンウディ(Hadji Samanhoe'di)を中心として結成された。従来、スラカルタのパティック産業においては、20世紀初頭以来、華僑資本の参入にもかかわらず、ハジ・サマンウディが会党コン・シンの役員であったように、華僑とジャワ人商人とは必ずしも敵対関係にはなかった。しかし、辛亥革命勃発の報がジャワに達して以来、華僑のあいだでは中華ナショナリズム(またはショウヴィニズム)の意識が著しく昂揚し、スラカルタにおいても、コン・シン内部で華僑とジャワ人の緊張が激化した。ハジ・サマンウディがその一党をひきいてS(D)Iの前身レクソ・ルメクソ(Reksä Roemeksä, 警防団)を結成したのはこのためであり、またそれゆえにレクソ・ルメクソは当初よりコン・シン会員と暴力的衝突事件を繰り返したのである(注1)。

しかし、レクソ・ルメクソは、まもなく、スラ

カルタの警察担当ウエドノ(wedana polisi, ウエドノすなわち郡長と同等の階級を占める警察官)がその法人格保持いかんについて問い合わせたのを契機として、バイテンゾルフ(ボゴール)のジャーナリスト、ラデン・マス・ティルトアディスルヨ(Raden Mas Tirtoadisoerjo)の助力を得て規約を提出し、ティルトアディスルヨが1909年バイテンゾルフに設立していたイスラム商業同盟(Sarekat Dagang Islamijah)の支部を称することになった(注2)。これ以降、スラカルタのS(D)Iは1912年6月頃からスラカルタの地を越えて拡大しはじめたが、同年8月10日、スラカルタにおけるS(D)Iの活動が理事官(resident)によって禁止されたあと、スラバヤのチョコロアミノトが中央委員に就任し、9月14日、スラバヤにて政庁に対しS I規約承認・法人格付与申請を行なった(注3)。その後、S Iは翌年6月30日のS I規約承認申請却下の政庁決定までの期間に、ジャワ・マドゥラ全域に拡大した(注4)。この時期のS Iをめぐる事実関係には、なお不明の点が多い。そもそも、バイテンゾルフのイスラム商業同盟の支部を称したはずのスラカルタのS(D)Iが、はたして「イスラム商業同盟」(SDI)を名のったのか「イスラム同盟」(SI)を名のったのか、かりにSDIを名のったとすれば、いつからSIへと改称したのかすら明らかでなく、これが本稿において1911年暮から1912年8月までの時期の名称をイスラム(商業)同盟、S(D)Iとしている理由である(注5)。しかし、ここでは、これについての詮議は行なわず、S Iの成立と拡大をまず中心について検討することにしよう。

1. 中心の成立

まず、1913年3月23日スラカルタで開催されたS I会議までの時期について、S Iのフォーマルな組織構造とそこにおいて指導中枢を掌握した指

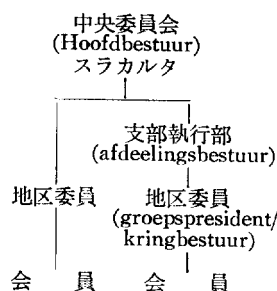
導者とを見てみよう。

この時期、S I のフォーマルな組織構造はめまぐるしく変化した。これは三期に分けて考えることができる。第Ⅰ期はS(D)I の設立から1913年1月25、26日のスラバヤ総会(algemeene vergadering)までの時期、第Ⅱ期は1913年3月23日のスラカルタにおけるS I 会議(congres)までの時期、そして第Ⅲ期は、1914年4月18～20日、ジョクジャカルタにて開催されたS I 会議(congres)までの時期である。ただし、この三期をとおして、S I 指導部にとっては、政庁が規約を承認するか否かが、その存続を決定する最重要問題であり、その意味で、1913年6月30日の規約承認申請却下の政庁決定と、この決定受諾を決議した7月10日のスラカルタ会議が運動の転換点をなしている。したがってここでは、第Ⅲ期については、1913年3月のスラカルタ会議から7月10日の会議までを論じることにする。第1図はこの時期のS I のフォーマルな組織構造を第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期について、第1表は中枢の指導者を第Ⅰ、Ⅲ期について掲げたものである。

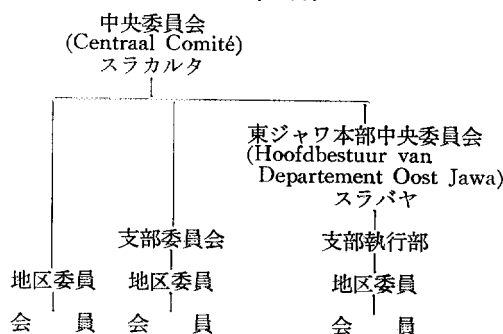
第1図に見るようにS I のフォーマルな組織構造がこの時期にめまぐるしく変化した理由は二つある。第1の理由は、S I がスラカルタからジャワ各地へ急速に拡大し、このためこれに対処しうる指導体制が必要とされたことである。ちなみにこの時期に設立されたS I 支部数を見れば、すでに1913年1月のスラバヤ総会に11支部が代表を派遣し、その2カ月後のスラカルタ会議には42支部が代表を派遣した^(注6)。第2の理由は、こうした運動の拡大にともなってスラカルタ以外の都市においてもスラカルタ指導部に対抗しうる指導者が現われてきたことである。あるいは、スラカルタ以外の都市におけるそうした指導者の登場が運動

第1図 イスラム同盟のフォーマルな組織構造

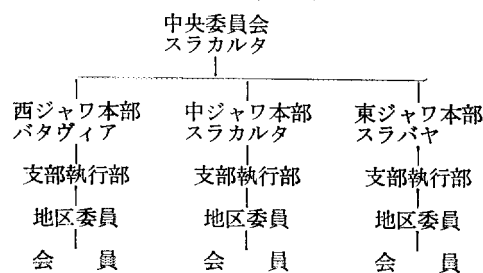
第Ⅰ期 (1911年～1913年1月)



第Ⅱ期 (1913年1月～1913年3月)



第Ⅲ期 (1913年3月～1914年4月)



(出所) 第1表に同じ。

拡大を加速したともいえる。なぜなら、運動の拡大とジャワ各地における支部の設立は、中心における指導者の勢力関係を左右するがゆえに、指導者は支部の設立に全力を傾けたからである。したがって、1913年1月のスラバヤ総会で合意され、3月のスラカルタ会議のあと実施に移された西ジャワ、中ジャワ、東ジャワ、三本部制は、拡大する運動の制御のためばかりでなく、スラカルタの指導者がバタヴィア、スラバヤを拠点とする指導

第1表 イスラム同盟中枢の指導者

第I期

議長	Mas Hadji Samanhoedi (商人)	スラカルタ
第一書記	Raden Ng. Djajamargasā (王侯領官吏)	スラカルタ
第二書記	Hardjosoemarto	スラカルタ
会計 I	Kartowihardjo (商人)	スラカルタ
会計 II	Mas Hadji Ngabdoelpatah	スラカルタ
委員	M. Ng. Kartohastono	スラカルタ
	M. Ng. Hasmoetani	スラカルタ
	R. Ng. Mangoenprawiro	スラカルタ
	R. Ng. Taliwondo	スラカルタ
	M. Tjokrosoemarto	スラカルタ
	R. Dipāmartānā (商人)	スラカルタ
	R. M. Oemar Said Tjokroaminoto	スラバヤ

第III期

<中央委員会>

顧問	Pangeran Ngabehi (スラカルタ王家親王)	スラカルタ
議長	M. Hadji Samanhoedi (商人)	スラカルタ
副議長	R. M. O. S. Tjokroaminoto (『ウトウサン・ヒンディア』編集長)	スラバヤ
書記	R. Mohamad Joesoef (スマラン・ジュウオノ鉄道職員)	スマラン
会計	Mas Hadji Ngabdoelpatah	スラカルタ
委員	Hadji Hisamzaijni (商人)	スラカルタ
	R. Tjokrosoedarmo (公証人事務所職員)	スラバヤ
	R. Goenawan (『パンチャラン・ワルタ』編集長)	バタヴィア
	Hadji Achmad Dahlan (ムハマディア議長)	ジョクジャカルタ

<西ジャワ本部 (バタヴィア)>

議長	R. Goenawan	バタヴィア
書記	R. Boerhan Kartadiredjo	バタヴィア
会計	M. Andong	バタヴィア

<中ジャワ本部 (スラカルタ)>

議長	R. M. Ario Poespodiningrat (ブパティ)	スラカルタ
副議長	R. Dipāmartānā (商人)	スラカルタ
書記	R. Ng. Djajamargasā (王侯領官吏)	スラカルタ

<東ジャワ本部 (スラバヤ)>

議長・書記	R. Adiwidjojo (firma Gompén & Co. 職員)	スラバヤ
副議長	R. Tjokrosoedarmo (公証人事務所職員)	スラバヤ
委員	Hadji Hasanstipo (靴職人)	スラバヤ
	Hadji Abdoelrachman (商人)	スラバヤ
	M. Wongso (Nieuw Prauwenveer 職員)	スラバヤ
	M. Tjokrodipoero (教師)	スコドノ

(出所) *Sarekat Islam Lokal*, pp. 332-335; Ass. Res. Voor Politie aan Res. Soerabaja, 21 Feb. 1918, Mr. 490/13; Res. Soerakarta aan G. G., 26 Maart 1913, Vb. 9-8-13-B¹³; Van der Wal, S. L., *De Opkomst van de Nationalistische Beweging in Nederlands-Indië*, Groningen, J. B. Wolters, 1967, pp. 190-200.

者を認知し、相互の勢力圏の分割をはかったものでもあった。

つぎに第1表から明らかなごとく、S I の中枢指導者は、地域的には主にスラカルタ、スラバヤ、バタヴィアを拠点とし、社会的には、一般に、敬虔なイスラム教徒でもある商人(サントリ商人)か、ラデン、マス、ラデン・マス、ラデン・ンガベヒなどのプリアイ(貴族)出身を示す称号をもつ官吏、事務職員、知識人であった^(注7)。以下、やや詳細にジャワ3地域に現われたS I 中枢の指導者について見よう。

中ジャワ——この時期を通じS I の最も有力な中枢を構成したのは、スラカルタのレクソ・ルメクソ結成以来の指導者たちであった。この中心はハジ・サマンウディである。かれは、スラカルタ王侯領カラングニャル県デサ・ソンドコロ(Kabupaten Karanganyar, Desa Sondokoro)の出身で父の代からのパティック商であり、1900年代にはスラカルタ、ラウエアン地区の有力者のひとりであった。S(D)I 設立当時、かれはすでに事業の成功によりスラバヤ、バニウワング、トゥルンガングン、バンドゥン、パラアンなどに支店を構えており、S(D)I の拡大においてもかれのこのような商業的ネットワークが重要な役割を果たしたことは疑いない。またかれは1904年にメッカ巡礼を行なってハジとなっていたが、決してキアイ(kijai, イスラム教師)ではなく、プサントレン(pesantren, イスラム塾)においてイスラムの教義を学習したこともなかった^(注8)。スラカルタのS I 指導部は、このサマンウディを中心として、ラウエアン地区の敬虔なイスラム教徒でもあるパティック商人とラデン・ンガベヒの称号を持つスラカルタ王家ゆかりの上級プリアイとからなった(第1表参照)。

このことは、しかし、スラカルタにおいて知識

人が指導的役割をはたさなかったということではない。この意味で1911年11月、レクソ・ルメクソからS(D)I への改称、規約作成において、ラデン・マルトダルソノ(Raden Martodarsono)とティルトアディスルヨが果たした役割は注目に値する。マルトダルソノは、この当時、スラカルタで発行されていたマレー語紙『ジャウィ・ヒスウォロ』(*Djawi Hiswara*)とジャワ語紙『ジャウィ・コンド』(*Djawi Kāndā*)の編集補佐であった。またティルトアディスルヨは、当時東インドの現地語紙の中で最も代表的とされた新聞『メダン・プリアイ』(*Medan Prijaji*)の編集長であり、かれ自身が1909年バイテンゾルフに設立したイスラム商業同盟(Sarekat Dagang Islamiyah)の書記でもあった。そしてマルトダルソノは、『ジャウィ・ヒスウォロ』紙、『ジャウィ・コンド』紙の編集補佐に就任する前に、『メダン・プリアイ』紙の編集補佐としてはじめてジャーナリズムの世界にはいったのである。マルトダルソノとティルトアディスルヨがスラカルタで重要な役割を果たすことになったのは、このような人間関係のゆえであった。すなわち、1911年11月、スラカルタの警察担当ウエドノが、レクソ・ルメクソに対し法人格取得につき問い合わせると、サマンウディの腹心ジョヨマルゴソはただちにマルトダルソノに対処方を相談し、これに応じてマルトダルソノはウエドノに対しレクソ・ルメクソはバイテンゾルフのイスラム商業同盟の支部であると回答したのであり、またウエドノより規約の提出を命じられるとすぐにティルトアディスルヨの助力を求めたのである^(注9)。

この当時、東インドでは、統治規則第111条の規定により、政庁が規約を承認し法人格を付与した団体以外はすべて原理的には秘密結社とみなされ、理事官はいつでもそうした団体の活動停止を

命令することができた。したがってS(D)Iにとっても、政庁による規約承認・法人格付与はその存在にとってきわめて重要であった。ところが、スラカルタのバティック商人や上級プリアイをふくめ一般のジャワ人には、規約とはそもそも何であり、また規約を作成して政庁にその承認を申請するにはどのような手続きが必要かといったことはその理解と能力を越えることであった^(注10)。マルトダルソノやティルトアディスルヨの助力が要請されたのはこのためであった。

もっとも、問題が規約の作成だけならば、規約承認申請手続きが完了するとともに知識人の役割も終わる。しかし、実際には、S(D)Iのスラカルタ以外の地への拡大によって知識人の役割はますます拡大していった。なるほどS I運動の拡大においては、サマンウディの弟がバンドウンにダルモ・ルマクソ(Darma Loemaksa)を設立し、あるいはスラカルタS(D)Iの使者(utusan)がジョクジャカルタにバティック商でかつ改革派イスラムの教育運動団体ムハマディア(Moehammadiyah)の指導者キアイ・ハジ・ダフラン(Kijai Hadji Dahlan)を訪れたように、ジャワ各地を結ぶ商人のネットワークが重要な機能を果たした^(注11)。あるいは上級プリアイも、ジョヨマルゴソがマディウン、ンガウイでS Iの宣伝集会を主宰したごとく、運動の拡大に貢献した^(注12)。しかし、商人にせよ上級プリアイつまりスラカルタ王侯領の官吏にせよ、かれらの行動の自由は商人あるいは官吏であるがゆえに制約されており、SI指導のための活動は「余暇」の活動たらざるをえなかった。ジョヨマルゴソが許可なく任地(スラカルタ市)を離れたかどで処分を受けたごとく、かれらの活動には時間的、空間的に大きな制約があったのである^(注13)。

これに対し、ティルトアディスルヨは、パイテ

ンゾルフにおいて『メダン・プリアイ』紙の編集発行人でありながら、しばしばスラカルタを訪れ、さらに1912年4月には東ジャワのマディウン、クディリ、スラバヤでもS(D)Iの宣伝活動を行なった^(注14)。またマルトダルソノは、1912年2月にはスラカルタの華僑シー・ディエン・ホ(Sie Dien Ho)に対するボイコットを組織し、さらに7月にはスラカルタ王侯領農村部で同盟員による労役拒否、内務官吏に対する不敬行為が勃発すると、現地に赴いて事態の収拾に努めた^(注15)。つまり、かれらは、商人あるいは官吏に比較して、S Iを指導していく上ではるかに大きな行動の自由を保持していたのである。

くわえて、機関誌『サロトモ』(*Sarotomo*)の発行も知識人の役割を増大させることになった。もとより、機関誌の発行それ自体、S Iの拡大によって運動の制御のために必要とされたのであるが、ここで注意すべきことは、機関誌の編集・発行が知識人の固有の領域であったことである。機関誌『サロトモ』は1912年5月頃創刊され3号までは、編集長ティルトアディスルヨ、編集補佐マルトダルソノであった。そして、このあと、ティルトアディスルヨが『サロトモ』印刷費横領事件によってスラカルタのS I指導部より絶縁されてのちは、マルトダルソノが編集長として『サロトモ』の編集発行にあたり、さらに1913年にはいつて、『メダン・プリアイ』紙の元編集補佐マス・マルコ・カルトディクロモ(Mas Marco Kartodikromo)が参加した^(注16)。

このように、ティルトアディスルヨとマルトダルソノの2人のジャーナリストは、この時期、スラカルタにおいてきわめて重要な役割を果たした。しかし、スラカルタは、以下に見るスラバヤ、バタヴィア、バンドウンなどと比較して、S I発

祥の地であり、また創設者ハジ・サマンウディの地元であるがゆえに、かれらは常にサマンウディ以下のレクソ・ルメクソ時代以来の指導者に従属せざるをえなかった。

スラカルタのS I指導部としては、さらに1913年3月のスラカルタ会議において、スラカルタ王家親王パンゲラン・ンガベヒ (Pangeran Ngabehi) が中央委員会顧問に、ブパティ (県長、スラカルタ市担当) のラデン・マス・アリオ・プスポディニングラット (Raden Mas Ario Poespodiningrat) が中ジャワ本部議長に、そして、ブパティ (スラカルタ王家王宮内担当) のラデン・マス・アリオ・スルヨディニングラット (Raden Mas Ario Soerjodiningrat) がスラカルタ支部委員会議長に就任した^(注17)。しかし、このような人事は、当時S I中枢にとって最大の懸案事項であった規約承認、法人格取得を容易にするためであり、かれらが実際にS Iにおいて指導的役割を果たしたということではない。

1913年3月のスラカルタ会議では、そのほかに中ジャワからはスマラン支部代表ラデン・モハammad・ユスフ (Raden Moehamad Joesoef) とジョクジャカルタ支部代表キアイ・ハジ・ダフランも中央委員会委員に選出された。しかし、1917、18年以降、S Iの二大拠点として現われることになるこの二都市は、初期イスラム同盟の時期には中枢とはならなかった。

まずスマランでは、1912年末までにすでにスラカルタからの使者によって支部が結成されていた。しかし、スマランでは1913年初め頃、同盟員による華僑暴行事件が発生し、スマラン県のパティ (patih, 県助役) がS Iスマラン支部委員会の改組を要求して圧力をかけた。こうして4月中旬には、スマランの原住民官吏の団体マングンハルジョ (Mangoenhardjo) の会員を中心とする新執行部

が選出され、議長にはスマラン県庁勤務の吏員マス・スジョノ (Mas Soedjono) が就任した。ムハマッド・ユスフは副議長に選出されたが、支部委員会を掌握しえず、またスマラン・ジュウオノ鉄道の職員としてかれの行動の自由も制約されていた^(注18)。

ジョクジャカルタでは、ダフランの主たる活動は、ちょうどこの頃かれが設立したムハマディアの発展に向けられた。原住民問題顧問官リンケス (D. A. Rinkes) の報告によれば、スラカルタのS(D)Iの使者はすでに1912年7月にダフランを訪れ、S(D)Iへの参加を勧誘したという^(注19)。しかし、このときダフランは、S(D)I参加に消極的であり、1912年3月14日S Iジョクジャカルタ支部が設立されたときにも、支部委員会にはムハマディアからは書記ハジ・アブドゥルラ・シラット (Hadji Abdoellah Sirat) が委員に就任したにすぎなかった^(注20)。しかし、このあと、ジャワ各地におけるS Iの急速な拡大によってその政治的社会的重要性が増すにつれ、ジョクジャカルタ支部委員会ではムハマディア系指導者が進出し、1914年初頭までに、ダフランが議長に、シラットが副議長に就任して、ジョクジャカルタ王家およびバク・アラム王家につかえる守旧派 (kaoem kolot) の宗教官吏が排除されていった^(注21)。すなわち、ダフランは、S I支部がイスラム改革主義を標榜するムハマディアに反対する守旧派の拠点となることを警戒して支部委員会を掌握したのであり、支部はムハマディアの発展に妨げとならない範囲内でのみその存在を許されたのである。こうして、ジョクジャカルタでは、初期S Iの時期を通じてS Iの活動は低迷し、会員数も、たとえば1913年3月において、カウマン地区 (イスラム教師、パティック商人など敬虔なイスラム教徒の居住地区) のサント

り商人と下級官吏を中心として700名弱を数えるにすぎなかった^(註22)。

東ジャワ——東ジャワにおけるS Iの拠点はスラバヤであり、支部は、1912年10月にチョクロアミノトを議長として設立された^(註23)。しかし、ここでは、これに先立ちすでに6月頃からスラカルタからの派遣使節の宣伝活動に応じ、S Iの参加者が出始めていた。すなわち、1912年6月スラバヤにおいて宣伝活動を行なった使節団の報告によれば、すでにこのときにハジ・ハサン・アリ・スラティ(Hadji Hasan Ali Soerati)、チョクロアミノト、ラデン・チョクロスダルモ(Raden Tjokrosodarmo)らやがてスラバヤの指導部を構成する人々が、S(D)Iに参加した^(註24)。

しかし、スラバヤでは、スラカルタと比較して、当初よりジャーナリスト、民間企業勤務の事務職員など洋式教育を受けた知識人が運動の指導性を掌握し、アラブ・インド系を中心とするイスラム商人は、資金提供者としてはともかく、運動の指導面からは急速に後退していった。このことは初期S Iの時期を通じてS Iの司令部となった株式会社スティア・ウサハ(Soetia Oesaha)の設立とその軌跡に見ることができる。

スラバヤでは、すでに1900年代半ばから、アラブ・インド人コミュニティ内部で、アル・イフワン(Al Ichwan)、ジャミアット・アル・ハイル(Djami'at al-Chair)などの団体がイスラム改革主義の影響下、イスラム教育の近代化を目的として設立され、これとともにイスラムをシンボルとする集団意識が昂揚しつつあった。そしてその後、1911年10月に中国で辛亥革命が勃発し華僑の中華ナショナリズムが昂揚すると、1912年初めより、アラブ・インド人コミュニティと華僑コミュニティのあいだの緊張が著しくたかまった。アラブ、インド人

を中心とするイスラム商人は、華僑の編集・発行する『プワルタ・スラバヤ』(*Pewart Soerabaja*)紙、『ビントラン・スラバヤ』(*Bintang Soerabaja*)紙などの新聞に広告を掲載することを潔しとせず、イスラム教徒自身の新聞の発行とイスラム教徒のための病院設立を計画し、この目的で1912年半ばにスティア・ウサハを設立した。スティア・ウサハの設立にあたっては、取締役役に就任したハジ・ハサン・アリ・スラティ一族と数名のアラブ人が資本金5万ギルダールの約半分を出資し、残りは、スマラン、プカロンガン、バタヴィア、バンドゥンなどのアラブ・インド系イスラム商人とジャワ人商人が出資した。当初、スティア・ウサハ発行の新聞『ウトウサン・ヒンディア』(*Oetoesan Hindia*)紙の編集長にはチプト・マングンクスモ(Tjipto Mangoenkoesomo)が予定された。しかし、チプトがダウエス・デッケル(Douwes Dekker)の説得によって東インド党(Indische Partij)に参加し、東インド党機関誌『エクスプレス』(*De Express*)の編集長としてバンドゥンに移ったため、編集長にはチョクロアミノトが就任した。『ウトウサン・ヒンディア』紙は1912年12月に創刊され編集補佐には、民衆啓蒙委員会(Commissie voor Volkslectuur、のちのバライ・プスタカ[Balai Poes-taka])の元職員ラデン・ティルトダスジョ(Raden Tirtodanoedjo)が就任した。

チョクロアミノトはマディウン理事州の出身で、父はボノログ県のウェドノ(群長)であり、ラデン・マス(称号)の示すとおり上級プリアイの出身であった。かれはマグランの官吏養成学校(Osvia)を卒業後、一時期、マディウン理事州ンガウィ県のパティの事務官としてパンレ・プロジョ(pangreh pradjā、原住民内務官僚)にはいったが、1907年には単調な職務と煩瑣なホルマット(hor-

mat, 上級者に対する尊敬と服従と忠誠の念を示すために従われるべき詳細をきわめて規定された礼儀作法)を嫌って退職した。チョクロアミノトはその後、スラバヤの職業訓練コースで機械工としての訓練を受けたあと1911年から1912年までスラバヤ近郊のロゴジャンビ製糖工場に勤務し、S I 参加後まもなくS I の専従活動家となった。かれ以外のスラバヤの指導者として、チョクロスダルモはスラバヤの公証人事務所の職員で、各種団体規約の作成に通じ、チョクロアミノトの友人であった。またアルディウィナタは、スティア・ウサハにおけるチョクロアミノトの代理人 (procureur-generaal) を務める腹心であった。こうして、スラバヤのS I 指導部は当初よりチョクロアミノト派が優勢であったが、さらに1913年8月には、スラティがスティア・ウサハ取締役から辞任に追いこまれ、かわってチョクロアミノトが取締役に就任した。スラティがスティア・ウサハより排除された理由は不明であるが、チョクロアミノトはこれによってスラバヤのアラブ・インド人コミュニティの支持を失いはしなかった。なぜなら、チョクロアミノトは、取締役就任に必要な5000ギルダールのスティア・ウサハ株取得資金を、アラブ人から調達したからである(注25)。

西ジャワ——西ジャワでは、バタヴィアのラデン・グナワンとバンドウンのラデン・マス・スワルディ・スルヨニングラット (Raden Mas Soewardi Soerjaningrat) が対立した。

バタヴィアでは、1913年3月、スラカルタ会議開催に先立って支部結成集会が開催され、会員数はまもなく1万2000人に達した。支部結成集会には中央委員会委員ラデン・ハジ・ディポマルトノ (Raden Hadji Dipāmartānā) がスラカルタより代表として出席し、グナワンが支部委員会議長に選出

された。グナワンは1880年、マディウン理事州ンガウィ県にアシステン・ウェドノ (assistent wedana, 副郡長) を父として生まれた。かれはプロボリンゴの住民官吏養成学校を卒業後、パンレ・プロジョにはいり、その後『メダン・プリアイ』紙においてティルトアディスルヨの編集補佐としてジャーナリズムの世界にあった(注26)。グナワンがいつごろ、S I に参加したのかは明らかでない。しかし、注目すべきことは、チョクロアミノトと同様グナワンも、当初より専従活動家としてS I の宣伝活動を行ない、西ジャワにおける事実上のS I 機関誌『パンチャラン・ワルタ』 (Pantjaran Warta) を編集発行するとともに、1913年3月中旬以降、プルワカルタ支部、タンゲラン支部、バイテンゾルフ支部とバタヴィア地域で支部を相ついで設立していったことである。特に、1913年4月6日、その指導下に設立されたバイテンゾルフ支部では、支部委員会のアラブ人顧問にこの地のアラブ人 (正確にはトルコ系) 名望家出身のサイド・バジュネット・エフェンディ (Said Badjenet Effendi) が就任した(注27)。このことは、かつて1909年にティルトアディスルヨがこの地に設立したイスラム商業同盟の議長がやはりバジュネット一族のシェフ・アフマッド・ビン・アブドゥルラフマン・バジュネット (Sjeh Achmad bin Abdoelrachman Badjenet) であったことを想起させる(注28)。すなわち、グナワンは、かつてティルトアディスルヨがイスラム商業同盟の設立にあたって獲得したこの地のアラブ・インド人コミュニティ、サントリ商人の支持を、S I 支部の設立において再び獲得したのである。バタヴィア理事官の報告によれば、グナワンはS I の宣伝においてもっぱら「イスラムの促進」 (memajukan Islam) を訴え、敬虔なイスラム教徒の支持獲得を試みたと

いう(注29)。

これに対し、バンドゥン支部では、指導部は当初より東インド党の影響下にあり、サントリ商人の支持獲得には失敗した。これは、第1に、同地では、支部結成に先立って、「イスラムの促進」を目的とするダルモ・ルマクソが設立されたこと、第2に、同地が東インド党の拠点であったことによる。すなわち、バンドゥンでは、1912年10月頃ハジ・サマンウディの弟でバンドゥンに居住するパティック商人ハジ・アミル (Hadji Amir) がダルモ・ルマクソを設立した。これに対しS I支部は1912年12月25日、ダルモ・ルマクソとは無関係におりから東インド党結成集会出席のためバンドゥンを訪れたチョクロアミノトとハジ・ハサン・アリ・スラティの指導下に結成された。チョクロアミノトとスラティは、支部結成集会開催に先立ちハジ・アミルと会談し、ダルモ・ルマクソのS Iへの合流を説得した。しかし、ダルモ・ルマクソ役員会議は、ダルモ・ルマクソのS Iへの合流、ダルモ・ルマクソ資金3分の1のS Iへの譲渡、S I代表者のダルモ・ルマクソ役員会への参加を討議ののち否決し、参加を見合わせた。S I中央委員会代表は1913年3月下旬にもダルモ・ルマクソとバンドゥン支部との統一を試みた。しかし、この時にも、ダルモ・ルマクソはS I支部が教育と経済的向上のみを重視し、「イスラムの促進」を軽視していること、そしてS I規約が未承認であることを理由にS Iへの合流を拒否した(注30)。

こうしてバンドゥン支部は、サントリ商人の支持を欠いたまま、議長スワルディ、書記ウィグニャディサストロ (A. Wignjadisatra)、副議長アブドゥル・ムイス (Abdoel Moeis) の指導下におかれた。スワルディは、かれ自身の回想によれば、チョクロアミノトの説得によって、プディ・ウトモ

(Boedi Oetomo) を脱退してS Iに参加した(注31)。

かれはジョクジャカルタのバク・アラム王家の出身で、この当時は東インド党機関誌『エクスプレス』の編集補佐、校正担当係であり、この頃バンドゥンにあつて同誌を主宰し、東インド党を指導したダウエス・デッケル、チプト・マングンクスモと並んで、東インド党の指導者としても頭角を表わしつつあつた。また、ウィグニャディサストロはバンテンの出身で当時25歳、かつて『メダン・プリアイ』紙の編集補佐としてジャーナリズムの世界にはいり、ティルトアディスルヨと訣別ののち、1912年初めにバンドゥンで『カウム・ムダ』(Kaoem Moeda)紙を創刊していた。さらにアブドゥル・ムイスは西スマトラ出身で支部設立時には『プレアングル・ボーデ』(Preanger Bode)紙の校正担当係であつたが、まもなく『カウム・ムダ』紙の編集長に転じた(注32)。

このようにバンドゥン支部はジャーナリストの指導下におかれ、しかもバンドゥンが東インド党の本拠地であつたために、東インド党とりわけチプト・マングンクスモとスワルディの影響下におかれた。しかし、東インド党は、1913年3月10日、すなわちS Iスラカルタ会議の直前にその規約承認申請を東インド政庁によって却下された(注33)。この当時、S I中枢にとっては規約承認問題が最大の懸案事項であつたから、東インド党の影響下にあるバンドゥン支部の西ジャワにおける指導性を公認することはできなかった。スラカルタ会議で、グナワンが西ジャワ本部議長に任命され、一方、バンドゥン支部指導者が西ジャワ本部から完全に排除されたのはこのためであつた。

この結果、西ジャワでは、1913年8月にダウエス・デッケル、チプト、スワルディの3人の東インド党指導者がオランダに追放され、同党指導部

およびその影響下におかれたS Iバンドゥン支部が解体するまでの間、スワルディ指導下のバンドゥン支部委員会は、西ジャワにおけるS Iの指導性をめぐってグナワンを議長とする西ジャワ本部と対立し、独自の宣伝活動を展開した^(注34)。たとえばパイテンゾルフでは、1913年4月6日、グナワンの指導下にS I支部が設立された。すると、その翌日には、『メダン・プリアイ』紙の元編集補佐ラデン・ンガベヒ・チトロアディウィノト(R. Ng. Tjitroadwinoto) が集会を開催してS Iパイテンゾルフ支部に対抗して原住民同盟(Sarekat Boemipoetra)を設立したが、これはチプト、スワルディらがバンドゥンに設立した原住民委員会(Comite Boemipoetra)の支部であった^(注35)。また5月5日に結成されたメーステル・コルネリス支部では、当初、東インド党员ラデン・ダヌミハルジョ(R. Danoemihardjo) が指導性を掌握し、西ジャワ本部の指導性を承認せず、会費収入の30%上納を拒否した^(注36)。このように、グナワンの西ジャワ本部の影響力はバタヴィア地域においてすら不確定で、この状況は1913年8月以降にも続くことになった。

以上見たように、S I運動の指導性は、スラカルタにおいてこそサントリ商人と上級プリアイが掌握したものの、スラバヤ、バタヴィア、バンドゥンでは、知識人とくにジャーナリストが掌握した。これはすでにスラカルタ指導部におけるティルトアディスルヨとマルトダルソノの役割について論じたように、知識人だけが、S Iの専従活動家としてその宣伝指導に専念しえたからであり、また、かれらこそがオランダ人、ジャワ人内務官僚、新プリアイ(教師、医師、現業部門の政庁官吏)、サントリ商人、アラブ・インド人コミュニティ、

農民などさまざまな社会集団に対し、それぞれに了解可能なことばでS Iの目的を訴えるのに、シンボルの操作者としてもっとも卓越していたからである。

この意味で、原住民問題顧問官リンクスのサマンウディ評およびチョクロアミノト評はきわめて示唆に富む。まずリンクスはサマンウディについて次のように評する。すなわち、かれは、イスラム教育、洋式教育いずれも十分な教育を受けておらず、そのためみずからの居住するスラカルタ、ラウエアン地区内の諸問題についてはともかく、同地区を越える問題については、広い視野から適正な判断を下すことはできない。また、かれは演説の才もなければ洗練された立居振舞いもできず、頑固、偏狭でおよそ指導者たるの資質をまったく持っていない、と^(注37)。つまり、ハジ・サマンウディは、有力なバティック商として、かれの棲む商人の世界やあるいは商いを通じて交流のあるスラカルタの上級プリアイすなわちスラカルタ王侯領の官吏に対しては影響力を行使するずべを知っていた。しかし、その外の世界では、とりわけオランダ人内務官僚との交渉をともなう場においては、当初よりスラカルタ王侯領官吏のジョヨマルゴソや上級プリアイのスモアスモロ(Soemâasmâra)あるいはジャーナリストのマルトダルソノらに全面的に依存したのである^(注38)。サマンウディがジャワ語のみを解し、マレー語、オランダ語に全く通じていなかったことは、S Iの指導者として、この意味でまさに決定的な弱点であった。

これに対しチョクロアミノトは、リンクスによれば、マディウン理事州ポノロゴ県の上級プリアイの出身としてその態度、物腰は洗練されており、また原住民官吏養成学校を卒業して短期間とはいえ内務官僚として官途に就いたこともあって、オ

ランダ語、マレー語に通じ、オランダ人、ジャワ人内務官僚に対処する法を熟知していた。さらに祖々父がポノロゴの有名なキアイ（イスラム教師）であったこともあって、敬虔なイスラム教徒である商人あるいはプサントレン（イスラム塾）を主宰するキアイとも自由に立ちまじわり、さらにまた天性の演説家であるとともに卓抜した政治的な勘をもっていた^(注39)。つまり、チョクロアミノトはサマンウディとは対照的に、東インド政庁に対しても、あるいは東インド社会の利害を異にするさまざまな社会集団に対しても、かれらと巧妙に交渉しました魅了する才能をもっていたのである。

もとより、当時の東インドにおいて、チョクロアミノトのごときジャーナリストはきわめて新しい存在であった。なぜなら、ジャーナリストが存在しうするためには、その編集発行する新聞を購読しうる社会層の成立が前提となり、そのような社会層の成立は、20世紀初頭以来の教育の拡充によってはじめてもたらされたからである。したがって、この当時、東インドにはなおごく少数のジャーナリストしかおらず、その半ばは、1907年から1912年にかけて東インド原住民の代表的新聞とみなされたティルトアディスルヨ主宰の『メダン・プリアイ』紙においてジャーナリストとしての訓練を受けた人々であった。ジャワ各地のS I 拠点において、マルトダルソノ、グナワン、ウィグニャディサストロ、マス・マルコなど『メダン・プリアイ』紙出身のジャーナリストがS I の専従活動家として重要な役割を果たしたのは決して偶然ではなかったのである。

2. 「進歩」と「イスラム」——運動の意味(1)

S(D)I 設立以来、1913年6月30日のS I 規約承認申請却下の政庁決定までの期間、S I 中枢の指導者にとって最大の課題は、第1に、政庁より規

約承認を受けてその存在の合法性を確保することであり、第2に、S I に対するできるかぎり広範な支持を諸社会集団より獲得することであった。この二つの課題は、しかし、実際には、同盟がいかなる目的をいかなる手段によって達成しようとする団体であるかを、指導者自身がどのようなことばで提示するか、別言すれば、指導者がS I の目的・手段系列における意味 (instrumental meaning) をいかに提示するかにまずもってかかっていた。この当時、S I 運動の拡大にともない、周辺部では、華僑に対する暴行事件、内務官僚に対する不敬事件、ラトゥ・アディル（正義の王）到来と理想の王国実現のうわさの流布など、多くの混乱が生じていた。S I 指導者は、このような混乱を前にして、一方では政庁に対し、これがS I の本来の目的からの逸脱であることを示すとともに、また一方では、サントリ商人、アラブ・インド人コミュニティ、下級官吏、教師、医師その他の社会集団に対し、S I がかれらの利益促進に努力するかれら自身の団体であることを示さねばならなかった。それでは、イスラム同盟の指導者は、このような意味付けをいかなることばによって行なったであろうか。

1912年9月14日S I 中央委員会委員チョクロアミノトがスラバヤの公証人の助力を得て政庁に対し承認申請を行なったS I 規約においては、S I の目的は次のように記されていた。

- (1) 原住民の商業精神を振興すること。
- (2) みずからの落度によることなく困難に陥っている会員に対し援助を与えること。
- (3) 原住民の精神的発展、物質的利益の促進、原住民の向上にともに努力すること。
- (4) イスラムに対する誹謗中傷に反対し、原住民の宗教生活をその法と慣習とにしたがって促進すること。

以上の目的を、法の許す範囲内で、かつ公共の秩

序と醇風美俗に抵触しないかぎりにおいて、しかるべき手段によって実現をはかる^(注40)。

このような規約において提示されたS Iの目的には二つの特徴がある。それは第1に、目的を表現することばが基本的にオランダの倫理主義イデオロギーのことばと等質であること、そして第2に、そのことばがきわめて多義的に解釈されうることである。この二つの特徴は、それぞれ、S I規約の承認を政庁より獲得するという課題と、できるかぎり広範な社会集団から支持を獲得するという課題とに対応している。

まず第1の特徴から検討しよう。20世紀初頭以来のオランダの植民地政策(倫理政策)はイデオロギー的には西欧の光が東インドの原住民社会の暗闇を照らすという比喩に見事に示されるように、白人の責務論に立脚していた。すなわち、先進ヨーロッパと後進アジアという構図の中で、オランダの東インド統治の任務は、オランダが東インドの原住民を指導・育成して進歩への途を歩ませることにあると意味付けられたのである。したがって、そのような倫理主義イデオロギーを構成する中心的シンボルは、「進歩」(voortuitgang)、「向上」(opheffing)、「発展」(ontwikkeling)であり、また「福祉の増進」(bevordering van welvaart)であった。

「独立」(onafhankelijkheid)ということばは倫理主義イデオロギーの語彙にありえず、かりに「自治」(zelfbestuur)が語られることがあったにしてもそれはあくまで「進歩」の途に沿った「発展」、「向上」のあとにくるものだった。イスラム同盟規約に提示された目的を表現することば、「商業精神の振興」(bevordering van handelgeest)、「物質的利益の促進」(bevordering van de materiële belangen)、「精神的発展」(de geestelijke ontwikkeling)、「向上」(opheffing)などがこのような倫理主義イデオ

ロギーのことばと同質であることは明らかであろう^(注41)。イスラム同盟を原住民の「覚醒」(ontwaking)、「時代精神」(tijdgeest)の現われ、と東インド総督イーデンブルフ(Idenburg)以下の倫理主義者がみなしたのは、このようなことばの等質性によっていたのである^(注42)。

もとより規約にも見るとおり、S I規約における目的提示のことばと倫理主義イデオロギーのことばは完全に同質ではない。イスラム同盟という名称の示すようにそれは「進歩」とともに「イスラム」をその中心的シンボルとしていた。しかしこの「イスラム」というシンボルは、「われわれ」と「かれら」、「内」と「外」を区別し、「内」を定義する集団表象であり、原住民社会内の利害を異にするさまざまな社会集団を結びつける「セメント」(bindmiddel)であった。したがって、「イスラム」は、ときにパン・イスラミズムへの警戒心を政庁当局者によびおこすことはあっても、倫理主義者は概してこれを原住民の西欧的進歩への努力を阻害する火難物とみなしたにすぎなかった^(注43)。

したがってS Iの目的は倫理主義者から見ればすこぶる「健全」なものであった。このことは、ちょうど同時期にダウエス・デッケルが東インド党結成について行なった意味付けと比較すればさらに明らかとなる。すなわち、ダウエス・デッケルは、東インド党の目的を「東インド人のための東インド」すなわち独立として提示し、東インド党の結成を、「光の暗闇に対する、善の悪に対する、文明の専制に対する、植民地納税奴隷のオランダ徴税国家に対する、宣戦布告」と意味づけた^(注44)。東インド党においては、「光」と「暗闇」の位置関係が倫理主義イデオロギーのそれとまさに逆転していたのである。

しかも、東インド党に対する政庁の態度は、S I 指導者に、倫理主義者が原住民の活動として許容する範囲をも示すことになった。東インド党は、1912年12月25日に結成されたあとただちに政庁に対し規約承認申請を行なったが、1913年3月中旬までに二度にわたるその規約承認申請は却下され、4月1日にはついに解党を余儀なくされた(註45)。こうして、たとえばチョクロアミノトは、1913年1月スラバヤにて開催されたS I 総会において、東インド党と一線を画すべくつぎのように演説した。

「S I は決して政党でも革命を目的とする党でもありません。われわれはオランダの統治に満足しているであります。……S I は身分・階級によって会員を区別することはありません。18歳以上のイスラム教徒で、その行ないの正しい者は誰でもS I に参加できるのであり、そしてすべての会員は兄弟であります。……ジャワ人は覚醒しはじめたのであり、これは、他の民族はいざ知らず、いかなる抑圧によっても決してとどめることはできないのであります」(註46)

あるいはまた、1913年3月のスラカルタ会議において、スラバヤのイスラム改革主義者の団体ムラトウル・イフワン(Moeratoel Ichwan)議長サイド・アフマッド・ビン・アリムサワ(Sajid Achmad bin Alimoesawah)は、演説の中で、オランダ女王に対する忠誠、東インドの福祉の増進、原住民の進歩、イスラムの発展を訴えた(註47)。

オランダに対する忠誠の表明、さらには、「進歩」「向上」「福祉の増進」へのこのような訴えがたしかに政庁の規約承認を得るための意識的なシンボル操作であったことはいうまでもない。しかし、それにしても、「進歩」と「イスラム」を中心的シンボルとして構成されたイスラム同盟の目的が、機関誌によって、あるいはまた集会での演説によって人々に伝達されたのであり、それに

よってS I は意味付けられたのである。そしてここで政庁との関係で重要なことは、こうした目的の提示によって、S I 中枢が、運動の周辺部における混乱を、S I の指導理念からの逸脱として処理しそれに対する責任を回避しえたことであり、そしてまた、政庁とくに東インド総督イーデンブルフ以下の倫理主義者の好意的態度を確保しえたことである。

このことは東インド政庁内におけるS I 規約承認をめぐる政策決定過程にはっきりと認められる。すなわち、この過程において、政庁内の議論は、規約の内容にかかわるものではなく、S I 指導部がかくも巨大な運動をはたして制御する能力を持っているか否かをめぐるものであった(註48)。確かに政庁は1913年6月30日の決定によってS I 規約承認申請を却下した。しかしそれは東インド全域をその活動範囲とする統一的なS I を承認しないということであり、活動の地理的範囲を限定した、したがって、会員の制御可能性の高い地方SI (locaal Sarekat Islam) については、規約承認の用意のあることを明示していたのである(註49)。

つぎに、S I の目的を表現することばの第2の特徴、その多義性について検討しよう。ここでことばの多義性というのは、規約に掲げられた目的について、受け手がそれぞれの利害状況に応じて多義的な解釈ができ、またそのゆえにそのような目的達成のためにいかなる行動が要請されるかについてもさまざまな解釈が可能であったということである。すでに見たように、S I 中枢においてその指導性を掌握したのはスラカルタをのぞけばジャーナリストをはじめとする知識人であったが、支部レベルの執行部は新プリアイ(すなわち、ラデン、マスなどの下級プリアイの称号をもつ下級官吏、医師、教師)とサントリ商人、キアイ(イスラム

教師)によって構成された。これらの人々は、中枢との関係で見ると、中枢において指導的役割をはたしたイスラム商人(アラブ・インド系商人とサントリ商人)との人的関係をとおしてS Iに参加した人々か、さもなくば、中枢の指導者の編集発行する新聞の購読者であった。そこで以下サントリ商人と新プリアイとがいかなる利害状況にあったかをまず見て、その上でS Iの提示した目的の多義性がかれらの支持を獲得するうえでどのように機能したかを検討しよう。

東インドとりわけジャワのサントリ商人およびアラブ・インド系商人にとっては、19世紀末以来の東インド社会の構造的変化は華僑との経済的競合の激化として現われた。華僑コミュニティでは、1900年のバタヴィア中華会館の設立以来、中華会館、中華商会、書報社などが保皇党、清朝派遣使節、革命同盟会などの影響下にあつて中国の政治問題については立場を異にしつつも、華僑の地位改善については同一歩調をとった。こうして1904年には通行証制度、居住地制度が廃止され、華僑は経済活動を行なううえで従来よりもはるかに大きな行動の自由を確保した。加えて、19世紀末以降、それまで華僑に委ねられていたアヘン請負、質屋請負などがアヘン専売公社、公営質屋などに再編され、これにともなつて、従来これらの請負に投下されていた華僑資本が製糖業、パティック産業、タバコ(クレテック)産業などへと投資された(注50)。スラカルタにおけるジャワ人パティック業者と華僑の対立は、この意味では、当時ジャワ各地で繰りひろげられた華僑とアラブ・インド系商人、サントリ商人との経済的競合の一例にすぎなかったのである。あるいはまた、1912年10月に、スマランよりも早くクドゥスにスラカルタのイスラム(商業)同盟の支部が設立されたのも、

クドゥスのタバコ(クレテック)製造業をめぐるサントリ商人と華僑の対立を背景とするものであらう(注51)。

しかし、このような経済的対立が、華僑コミュニティとアラブ・インド人コミュニティあるいは原住民との対立へと変換される契機となったのは、一方でアラブ・インド人コミュニティおよびサントリ商人のあいだにおける「イスラム」をシンボルとする集団意識の昂揚であり、また一方で辛亥革命以降の華僑の中華ナショナリズムの昂揚であつた。すなわち、すでに1900年代半ばの頃より、ジャワの主要都市では、アラブ・インド人コミュニティを中心として、イスラム改革主義の影響下にイスラム教育の近代化を目的として、アル・ジャミアット・アル・ハイリア(Al-Djam' ig'at al-Chairijáh, バタヴィア)、アル・イルシャード(Al-Irsjád, スラバヤ)などの教育団体が設立されてゐた(注52)。また、ティルトアディスルヨは1909年にバタヴィア地域のアラブ人コミュニティおよびサントリ商人の支持をえて、イスラム教徒の商業振興を目的とするイスラム商業同盟をバイテンゾルフに設立し、まもなく資金難から活動停止に陥つたもののバタヴィア、ボンドウオソ、スカブミ、スラバヤにも支部を設立した(注53)。一方、華僑は、1911年10月、辛亥革命勃発の報に接すると、その中華ナショナリズムは著しく昂揚し、ジャワ人に対し、オランダ人、ジャワ人官僚に対するときと同様の礼儀作法(ホルマット)を華僑に対しても示すよう要求した(注54)。当時の東インド社会においては、ホルマットの体系は植民地秩序の象徴的表現であつた(注55)。こうして、ここに、アラブ・インド系商人、サントリ商人と華僑の経済的対立は、「イスラム」と「中華」の対立として政治化したのである。

これに対し、新プリアイの利害状況は、アラブ・インド人コミュニティ、サントリ商人とは全く異なっていた。元来ジャワにおいてプリアイとは、パンレ・プロジョ（内務官僚）に編成されたジャワ人貴族のことであった。しかし、19世紀後半以降、教育がしだいに拡充され、また東インド国家の活動領域が拡大するなかで、原住民医師（*dokter djawa*, *Indische arts*）、教師（*mantri guru*）、アヘン専売公社、公営質屋など政庁現業部門の職員が増加していった。そしてかれらは、出身のいかにかわらずプリアイの身分とされた。たとえば教師は、師範学校卒業後ただちにプリアイ身分となり、内務官僚におけるマントリ（*mantri*）に相当する地位を与えられるとともに、アシステン・ウェドノ（副郡長）と同水準の給与を得た。また医師は原住民医師養成学校（STOVIA）卒業後ただちにプリアイ身分に属するとともに、ウェドノ（郡長）と同水準の給与を与えられた。しかし、これらの新プリアイは、教育水準、給与の面では内務官僚と同等ではあっても、なお社会的出自によってその地位の大きく規定されるパンレ・プロジョの身分秩序の中では、ブパティ（県長）、ウェドノなどの上級官僚からは劣者とみなされ、上級者に対ししかるべき礼儀作法を示すよう要求されたのである（注56）。こうして、新プリアイのあいだでは、植民地社会における身分と地位の上下を象徴的に表示するホルマットの規定に大きな不満があり、かれらはホルマットの体系の中でその身分と地位にふさわしい位置を与えられることを要求していた。

S Iが「イスラム」と「進歩」に訴えて動員したのは、このような利害状況にあったアラブ・インド系商人、サントリ商人であり新プリアイであった。そして、かれらからの支持獲得において、

S Iの目的がきわめて多義的に解釈しうるということは決定的に重要であった。「原住民の精神的発展」「イスラムの促進」とは、イスラム教育の拡充、近代化からメッカ巡礼にまつわる手続きの簡素化、さらには異教徒に対する聖戦までさまざまな意味をもちえた。そして実際、この時期、S I運動の拡大にともなって金曜日のモスクでの礼拝者が激増したことなど、たしかに「イスラム」というシンボルの多義性によって誘発された行動であった。同様に、「進歩」も多義的に解釈された。すなわち、それは、サントリ商人にとっては協同組合の設立による革僑への対抗を、新プリアイには教育の拡充、ホルマット規定の簡素化などを意味したのである。

こうして支部のレベルでは、サントリ商人とプリアイによって執行部が構成され「イスラムの促進」のみを訴えた支部もあれば、下級官吏、教師などの新プリアイが執行部を掌握し、「イスラムの促進」という目的を等閑視して、もっぱら教育の拡充と商業の振興を訴えた支部も存在した。あるいはまた、原住民問題顧問官リンクスの報告に見るように、「イスラム」の名の下に、ジャワ神秘主義者も正統派イスラムの教徒もイスラム改革主義者もすべてS Iに参加した（注57）。つまり、支部の指導者は、自らの利害状況に応じてきわめて自由にS Iの目的を解釈し、かつこれを支部の会員に伝達したのである。

3. サトリオ——運動の意味(2)

S Iの目的・手段系列における意味が「進歩」と「イスラム」として提示されたとすれば、その表出的意味（*expressive meaning*）はサトリオ（*satria*, 志士）として指導者によって人格化され、かつ演じられた。ここでサトリオとは、本来、ジャワの伝統的な影絵芝居ワヤン（*wayang*）に登場する神々

の意志を実現すべく大義に生きる武人たちのことであり、それは、民がその時間と空間を農民、商人などの生活者として生きるのに対し、それをあげて大義の実現に献げることのできる自由な人々のことであった。すでに見たように、東インドにおいては、イスラム同盟の成立によってはじめ、ジャーナリストを中心として民族運動の世界こそがその生活の場である専従活動家の一群が誕生した^(注58)。かれらの生活は、機関誌を編集発行し、集会で演説し、支部の相談に応じ、政庁あるいはオランダ人、ジャワ人内務官僚と交渉する、そのような活動からなっていた。こうしてこの専従活動家のあいだでは、プリアイの世界とも商人の世界とも異なる独自の人間関係と行動の原理が生まれ、これをかれらはワヤンの世界に棲むサトリオを比喻として提示したのである。

このような自己規定・行動の原理としてのサトリオの意味をもっとも見事に示すものとして、かつてS I バンドゥン支部議長で、これを記した時にはすでに追放の身としてオランダにあったスワルディ・スルヨニングラットがスラカルタのS I 機関誌『サロトモ』によせた公開書簡がある。ここにおいてスワルディは、スラカルタS I 委員マス・マルコがその主宰する『ドゥニア・ブルグラック』(*Doenia Bergerak*)紙に掲載した記事のゆえに懲役2年を求刑されたと知って、次のように書いている。

「思うに民族を守るということは容易でもなければ楽しいことでもありません。しかしわれわれにとってそうしたことは義務なのであります。われわれは決してわれわれの希望を捨ててはなりません。いかに犠牲が大きくとも、必要とあらばみずからを犠牲にすることはわれわれすべてにとって義務なのであります。決して絶望してはなりません。羅刹と戦う勇気を持ったサトリオの候補者はなお数十人とおります。わ

れわれが銘記すべきことは、幸せとは称号や位階を保持することではないということです。私にとってのもっとも幸いなことは、心の幸せであります。筆禍事件によって貴兄はみずからを犠牲となしたのであり、すべての刑は貴兄にとっては榮譽のしるし、幸せのしるしなのであります」。^(注59)

あるいはまた、チョクロアミノトは、その編集発行する『ウトウサン・ヒンディア』紙に次のような一節の記事を掲載した。

「今日は人民運動の時代である。われわれは外国人の手中におちたわれわれの権利を取り戻す。『真実故に勇ましく』、そして神の御意志のままに、われわれは決して草のごとく踏みつけられたままではない」^(注60)。

ここで「真実故に勇ましく」(*berani karena benar*)は、初期S I のみならず、前期民族運動の時期を通じてそのスローガンとなったことばであり、その意味は、字義通りには、勇氣、勇敢さというサトリオの本性は神の意志を実践するがゆえに生まれてくるということであった。しかし、実際にはそのような神の意志を解きあかす統一的な教義体系は初期S I には存在しなかった。逆に、サトリオとしての犠牲を厭わぬ勇敢な行動こそがかれの実現しようとする神の意志の真理性を保証していた。すなわち、内容が形式を規定したのではなく形式が内容を保証したのである。

加えて、専従活動家の活動は、機関誌の編集発行にせよ、集会での演説にせよ、すべてそれなりの特殊な技能を必要とした。こうして、ジャワ各地のS I の拠点では、指導者を中心としてサトリオ養成塾ともいうべきものが成立し、ここでやがて人民運動の指導者となるべきサトリオが培養されていった。そのような養成塾の萌芽的形態はすでにティルトアディスルヨの主宰した『メダン・プリアイ』紙から多くのS I 指導者が出たことに

認められるし、またバンドゥンでは、1913年前半に東インド党の指導者ダウエス・デッケル、チプト・マングンクスマ、S I バンドゥン支部議長スワルディらを中心としてそのような養成塾が形成されていた。しかし、初期S I の時期を通じそうしたサトリオ養成塾としてもっとも重要なものは、スラバヤのチョクロアミノトを中心とするものであった。1912年10月のS I スラバヤ支部設立後まもなくS I に参加し、のちチョクロアミノトの腹心としてC S I 書記をつとめることになったラデン・パンジ・ソスロカルドノ (Raden Pandji Sosro!ardono) は、のちに東インド総督宛の上申書において、かれとチョクロアミノトの関係を思い起こしてこう述べている。

「チョクロアミノトは私にとって政治における師でありました。政党の党員としてもっとも重要なことはなにか、なにが義務であるかについて、私はチョクロアミノトより教えられ、かれの訓導を受けたのであります。つまり、部下は指導者のいかなる命令をも実行しなければならないこと、指導者がなにを望んでいるかをたとえはつきりと指示されなくとも正しく理解し、またかれを助けなければならないこと、そしてとくに部下は、義務の遂行にあたっては指導者が危険な立場に立たされることの決してないよう、できるだけ努力すること、それどころか必要とあらば指導者にかわってみずからを犠牲にしても指導者を危険にさらしてはならないということを、であります」(注61)。

ソスロカルドノはS I 参加以来、かれの弟子としてスラバヤのチョクロアミノト宅に同居し、かれの指示にしたがってこの時期、プカロンガン、トゥバン、スカラジャなどにおいてS I 支部の指導にあたった(注62)。同様に1913年後半にS I 運動に身を投じ、1914年4月以降、中央委員会書記・会計に就任したラデン・アフマッドは、マグランの官吏養成学校時代以来チョクロアミノトの同級生で、この頃からやはりチョクロアミノト宅に寄

宿していた(注63)。またのちには、このチョクロアミノトの養成塾からは、アビクスノ・チョクロソヨソ (R. M. Abikoesoeno T'okrosoejoso, チョクロアミノトの弟でのちスラバヤS I 議長)、プロトスハルジョ (Brotosoehardjo, 別名ディルジョスサストロ Dir-djoesastro, 『ウトウサン・ヒンディア』紙編集委員でのちCSI書記代理)、ムソ (Musso, のちインドネシア共産党指導者)、スカルノらが出ることになる(注64)。

こうして、S I の成立にともなってジャワの諸都市に現われた指導者たちは、植民地秩序の内部にありながら、大義の実現のためには自己犠牲をも厭わぬサトリオの自己増殖的な秩序空間を形成した。この秩序空間は、それが既成の権力秩序に拮抗しこれを対象化する共同体秩序を体现する点で、ジャワにおける伝統的なプサントレン(pesantren, イスラム塾)の秩序空間と比べることができるであろう。プサントレンにおいては、その主宰者キアイ(kijai, イスラム教師)とサントリ(santri, 塾生)は、世俗を離れた土地にともに起居し、イスラム法に規定された戒律にしたがって生活を構造化し、かくて世俗の秩序と隔離しそれを対象化する独自の秩序空間を創出し維持した。もとよりこのプサントレンの空間に永住する者はキアイとキアイを志す少数のサントリのみで、多くのサントリはやがては再びプリアイとして、商人として、あるいは農民として、世俗の世界にもどっていった。しかし、それにもかかわらず、プサントレンは、人々が身分、地位、役割の構造から切断されてすべてが等しくイスラム教徒として生活する場である。そして、そのような経験の人々に与えうるがゆえに、プサントレンは、世俗の自然化を妨げその状況化を促す文化的装置として機能した(注65)。

S I の成立とともに誕生した「人民運動の世界」

(dunia pergerakan)はこのようなプサントレンの民族主義の時代における再生と言いうる。プサントレンを貫いた秩序の原理はイラスム共同体(ummat Islam)であった。「人民運動の世界」の原理は、これに対し、サトリオの共同体であった。

(注1) Adviseur voor Inlandsche Zaken (以下 Adv. と略する), aan Gouverneur Generaal (以下 G. G. と略する), 23 Mei 1913, Vb. 9-8-13-B¹³. また Resident van (以下 Rs. と略す) Rembang aan G. G., 18 April 1913, Vb. 9-8-13-B¹³; Van der Wal, S. L., *De Opkomst van de Nationalistische Beweging in Nederlands-Indië*, Groningen, J. B. Wolters, 1967. pp. 170-171 参照。

(注2) Adv. aan G. G., 23 Mei 1913, Vb. 9-8-13-B¹³.

(注3) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 95, 172-173; Proces Verbaal Tjokroaminoto (以下 P. V. Tjokro と略す) Mr. 184 x/21.

(注4) Van der Wal, *op. cit.*, p. 216.

(注5) これについては、深見純生「いわゆるイスラム商業同盟について」を見よ。

(注6) Ass. Rs. aan Rs. Soerabaya, 21 Feb. 1913, Mr. 490/13; Rs. Soerakarta aan G. G., 26 Maart 1913, Vb. 9-8-13-B¹³. マディウン県プバティの理事官宛報告によれば、スラカルタ会議に代表を派遣した支部は48支部であったという。*Sarekat Islam Lokal*, pp. 304-307; Rs. Madioen aan G. G., 29 Maart 1913, Mr. 1096/13.

(注7) このうち、ラデン(Raden), マス(Mas)は下級ブリアイの、ラデン・マス(Raden Mas), ラデン・ンガベヒ(Raden Ngabehi), ラデン・パンジ(Raden Pandji)などは上級ブリアイの称号である。なお、称号については、Sutherland, H., "Pangreh Pradja," Ph. D. dissertation, Yale University, 1973, pp. 538-541 参照。

(注8) Noer, *op. cit.*, pp. 106-107. リンケスによれば、サマンウディは、パティック薬のほかに高利貸しとしてスラカルタのブリアイに多額の金を貸していたという。Van der Wal, *op. cit.*, p. 190.

(注9) Van der Wal, *op. cit.*, p. 88; Adv. aan G. G., 23 Mei 1913, Vb. 9-8-13-B¹³.

(注10) やがて1913年暮以降、地方 S I の設立が開

始されたとき、チョコロアミノトが、地方 S I 規約承認申請のため、規約と規約承認申請書類一式を地方 S I 執行部に送付したのみならず、書式をも指導したのはこのためである。P. V. Tjokro, Mr. 184X/21 参照。ブディ・ウトモ結成時におけるこれによく似たエピソードが、永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会 1980年 128ページに紹介されている。

(注11) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 88, 177. ムハマディアは、正式には、1912年11月18日にジョクジャカルタのカウマン地区に設立され、12月20日、議長キアイ・ハジ・ダフランと書記ハジ・アブドゥルラ・シラット(Hadji Abdoellah Sirat)を代表人として、政庁に対し規約承認の申請を行なった。規約に掲げられたムハマディアの目的は、ジョクジャカルタ住民のあいだにおけるイスラム教の促進と会員の宗教生活の促進であった。Alfian, "Islamic Modernism in Indonesian Politics: The Muhammadiyah Movement during the Dutch Colonial Period (1912-1942)," Ph. D. dissertation, the University of Wisconsin, 1969, pp. 243-245. 実際には、しかし、のちにムハマディアの中心的活動となる教育活動はすでに1912年8月には開始されていた。Van der Wal, *op. cit.*, p. 89. なお、キアイ・ハジ・ダフランについては、Alfian, *op. cit.*, pp. 228-240 を参照。

(注12) Rs. Soerakarta aan Directeur van Justitie, 5 Dec. 1912, Mr. 1096/13; Van der Wal, *op. cit.*, p. 195.

(注13) *Ibid.*

(注14) P. V. Tjokro, Mr. 184X/21; Van der Wal, *op. cit.*, p. 96.

(注15) Adv. aan G. G., 23 Mei 1913, Vb. 9-8-13-B¹³; Rs. Soerakarta aan G. G., Mr. 2301/12; Van der Wal, *op. cit.*, p. 85-87; Rs. Soerakarta aan G. G., 21 April 1918, Mr. 142 x/18.

(注16) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 88-92, 96-97, 379-380. なお、マルコについては、*Ibid.*, pp. 374-375 および *Sarotomo*, pp. 1-4, 280-283, 294 参照。

(注17) Res. Soerakarta aan G. G., 26 maart 1913, Vb. 9-8-13-B¹³.

(注18) Van der Wal, *op. cit.*, p. 176; Missive van Adv., 30 Nov. 1915, Mr. 1263/16; *Sarekat Islam Lokal*, pp. 136-138.

(注19) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 88-89.

(注20) Rs. Jogjakarta aan G. G., 26 April 1913, Vb. 9-8-13-B¹⁸.

(注21) Uittreksel behoort bij brief van het Departement van Oorlog, 11 Feb. 1914, Mr. 366/14; Voorloopige opmerkingen over de Sarekat Islam beweging, door A. J. N. Engelenberg, 6 Juni 1913, Vb. 9-8-13-B¹⁸. なお1912年11月18日ジョクジャカルタに設立されたムハマディアの中央委員会の構成については, Alfian, *op. cit.*, p. 241参照。

(注22) Rs. Jogjakarta aan G. G., 26 April 1913, Vb. 9-8-13-B¹⁸.

(注23) P. V. Tjokro, Mr. 184X/21.

(注24) *Sarekat Islam Lokal*, pp. 335-337.

(注25) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 173-175, 190-192, 195-196, 198-199; P. V. Tjokro, Mr. 184X/21.

(注26) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 192, 194-195; Noer, *op. cit.*, p. 107; Aan de Adv. toegevoegde ambtenaar aan G. G., 21 Feb. 1916, Vb. 1-9-17-32.

(注27) *Sarekat Islam Lokal*, pp. 7-10.

(注28) Sutherland, *op. cit.*, pp. 207-222.

(注29) Rs. Batavia aan G. G., 10 Mei 1913, Vb. 9-8-13-B¹⁸. また *Sarekat Islam Lokal*, pp. 13-15 参照。

(注30) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 177-178.

(注31) Dewantara, K. H., "Djiwa Nasional jang berdasarkan Islam," in *H. O. S. Tjokroaminoto, Hidup dan Perdjuaan*, ed. Amelz, Djakarta, Bulan Bintang, 1952, p. 31.

(注32) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 196-198. アブドゥル・ムイスの経歴については, Noer, *op. cit.*, pp. 108-109. 参照。

(注33) 東インド党については, Van der Veur, "Introduction to a Socio-Political Study of the Eurasians of Indonesia," Ph. D. dissertation, Cornell University, 1955, pp. 137-176. および Van der Wal, *op. cit.*, pp. 101-129. 参照。

(注34) ダウエス・デッケル, チプト・マングンクスモ, スワルディ・スルヨニングラットのオランダ追放については, 土屋健治『『原住民委員会』をめぐる諸問題——支配と抵抗の様式に関連して』(『東南アジア研究』Vol. 15, No. 2, 1977年9月) 131~152ページ参照。

(注35) *Sarekat Islam Lokal*, pp. 7-10.

(注36) *Ibid.*, pp. 15-18.

(注37) Missive van Adv., 30 Nov. 1915, Mr. 1263/16.

(注38) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 190, 199; *Ibid.*

(注39) Missive van Adv. 30 Nov. 1915, Mr. 1263/16. また Amelz, *op. cit.*, pp. 48, 65-66 を見よ。またチョクロアミノトの演説がどれほどに聴衆を魅了したかの例としては, Van der Wal, *op. cit.*, pp. 492-496 参照。

(注40) Van der Wal, *op. cit.*, p. 161.

(注41) このことは, 「問いの形式」が同じであるということもできる。S・K・ランガー著, 矢野萬里ほか訳『シンボルの哲学』岩波書店 1978年参照。

(注42) たとえば, つぎの一節を見よ。「イスラム同盟は, 私の見るところ, 原住民の覚醒というべきものの現われであります。……このこと自体にはなにも案ずることはありません。それどころか, それは, われわれの統治の望ましい成果なのであります。そしてそれは, 西欧の指導を求めているのであります。イスラム同盟はこのような覚醒の最初の現われではありません。しかし, それは, その急速な拡大と, 原住民がそれを熱狂的に迎えているということから, これまでよりも注目すべき現象なのであります」G. G. (Idenburg) aan minister van Kolonieën (De Waal Malefijt) 2 juli 1913, Van der Wal, *op. cit.*, pp. 287-288.

(注43) *Ibid.*, pp. 201-203 参照。

(注44) Van der Veur, *op. cit.*, p. 163.

(注45) *Ibid.*, pp. 169-172.

(注46) Ass. Rs. voor Politie aan Rs. Soerabaja, 21 Feb. 1913, Mr. 490/13.

(注47) Rs. Soerakarta aan G. G., 26 Maart 1913, Vb. 9-8-13-B¹⁸. サイド・アフマッド・ビン・アリムサワとムラトゥル・イフワンについては, Van der Wal, *op. cit.*, p. 199 参照。

(注48) 規約承認問題の決定過程については, Rutgers, Frederik Lodewijk, *Idenburg en de Sarekat Islam in 1913*, Amsterdam, 1939. および Van der Wal, *op. cit.*, pp. 241-304 参照。

(注49) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 277-280.

(注50) 白石隆「ジャワの華僑運動: 1900~1918年——「複合社会」の形成(1), (2)」(『東南アジア, 歴史

と文化』No. 2 1972年 35~74 ページ, No. 3 1973 年 28~58ページ)。および The Siauwi Giap, "Group Conflict in a Plural Society", *Revue du Sud-est Asiatique*, pp. 197-217 参照。

(注51) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 93-95; *Sarekat Islam Lokal*, pp. 131-132. クドゥスのクレテック(タバコ)産業については, Castles, Lance, *Religion, Politics, and Economic Behavior in Java: The Kudus Cigarette Industry*, New Haven, Yale University, 1972 参照。

(注52) Noer, *op. cit.*, pp. 56-69.

(注53) Sutherland, *op. cit.*, pp. 207-222.

(注54) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 88-89, 97.

(注55) ホルマットについては, Sutherland, *op. cit.*, pp. 141-156 参照。

(注56) Savitri Prastiti Scherer, "Harmony and Dissonance: Early Nationalist Thought in Java," M. A. Thesis, Cornell University, 1975, pp. 22-45 参照。

(注57) Van der Wal, *op. cit.*, pp. 89-90.

(注58) アメルツの表現を借りれば, 指導者は, 人民運動の場から「食扶持」を得たのである。"Lapangan itulah yang menjadi 'makanannya' sehari-hari," Amelz, *op. cit.*, p. 66.

(注59) "Surat Terboeka: Soewardi Soerjaningrat kepada Marco, Den Haag, 13 Aug. 1915," *Sarotomo*, pp. 125-126. 同様にチブトはこの時期, S I 資金使途不明問題に関連して, グナワンを「偽サトリオ」(ksatria maling)と批判した。*Sarotomo*, p. 246. 前期人民運動における「サトリオ」と「バンディト」の意味については, 白石隆「人民主義をめぐって——チブト・マングンクスモ vs. スタットモ・スリヨクスモ」(『東南アジア研究』Vol. 17, No. 4 1980年 3月) 741~755ページ参照。さらに, 「サトリオ」の再生とともに牢獄の意味もまた逆転した。すなわち, ワヤンの世界に棲むサトリオが「靈力」を集中し神の啓示を得るべく人里離れた山奥で瞑想と苦行の時を過ごしたごとく, 牢獄は, 人民運動の世界に棲むサトリオにとり, 瞑想(samadi)と禁欲(tapa)の場となったのである。

(注60) Voorloopige opmerkingen over de Sarekat Islam beweging door Engelenberg, 6 juni 1913, Vb. 9-8-13-B¹³.

(注61) Sosrokardono aan G. G., Weltevreden, 18 Nov. 1920, Mr. 1353X/20.

(注62) *Ibid.*

(注63) P. V. Tjokroaminoto, Mr. 184 x/21.

(注64) チョクロアミノトの養成塾の雰囲気については, シンディ・アダムス著, 黒田春海訳『スカルノ自伝』角川書店 1971年 53~58ページ(ただし, チョクロアミノトがジョクロ, 神智学が接神学と誤訳されている)参照。また師としてのチョコクロアミノトについては, Hamka, "H. O. S. Tjokroaminoto membukakan mataku", in Amelz, *op. cit.*, pp. 34-49を見よ。

(注65) プサントレンについては, Steenbrink, K. A., *Pesantren, Madrasah, Sekolah: Recente Ontwikkeling in Indonesisch Islamonderricht*, KRIPS REPRO MEPPPEL, 1974, pp. 13-20およびAnderson, Benedict R. O'G., *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-1946*, Ithaca and London, Cornell University Press, pp. 1-15. 参照。

(東京大学教養学部助教授)